

昭和20年～現在

金子 芳雄

わたくしの執筆担当は、「体育会小史(戦後～現在)」である。冒頭より私事にわたり恐縮であるが、昭和25年3月慶應義塾大学を卒業し、昭和31年丘の上硬式野球クラブ(体育会塾内競技部所属)の部長、昭和40年ヨット部長、昭和48年体育会理事、昭和63年体育会顧問、平成2年慶應義塾退職であるから、塾在職40年のうち、最初の約6年が体育会と関係がなかっただけである。したがって戦後の約50年、すなわち、わたくしの執筆担当期間の大部分は、体育会を目でみ、耳できいてきた。そしてこの期間には、幾多の名物男、豪傑などのツワモノが輩出し、彼らの行為は、伝説としあるいは罪のない噂ばなしとして、今なお一部で語りつがれている。しかし本稿は「小史」といえども、体育会の正史である。したがってこのような面白い話は、もし将来、わたくしが体育会外史を書く機会があれば、そのとき記述することにした。

1 荒廃から復興への昭和20年代

戦後の体育会は、昭和21年6月1日に、常議会でその復活を承認したときから始まる。昭和18年頃から、第2次世界大戦に学徒が続々と出陣し、大学は、事実上空白状態となり、その活動はすべての面において停止していた。

戦後、当時の占領軍は、学校教育から、軍国主義教育につながるとして、柔道、剣道、弓術を追放した。このため、この3部は学内で活動できず、縁故をたより個人の経営する道場(柔道:飯塚道場、剣道:良武館・養和会道場、弓術:中村道場)で練習をし、5、6年を経過し、やっと体育会へ復帰するとい

う、苦難の道を歩まねばならなかった。

一方、他の部といえども安穏な日々を送ったわけではない。三田地区は、米軍の爆撃のため多くの施設を失った。日吉地区は、戦時中、旧海軍の中核施設として利用されていたためか、占領軍にその中心部分が接収された。そして接収を免れた土地は、当時の食糧難のため、芋畑等として使用されていた。

当時の部員は、まず食糧を確保し、ついで用具をさがし(もちろん当時、用具の製造などされていないから、戦前にあったものをさがすか、占領軍の中古品を手に入れるかであったろう)、なんとか練習をし、対外試合を行うという状態であった。

なお、体育会が復活した当時、体育会には23部があった。現在行われている体育会各部の呼称順序でいうと、柔道部からバレーボール部までである(なお、塾内対抗競技部あるいは塾内競技部は、他部と較べ性格が異なるので、別途の取り扱いとした……関係各位のご了承をお願いしたい)。

そしてこれらの部のなかで、蹴球部が体育会正式復活以前の昭和21年1月1日に、対京都大学定期戦を行った。さらに同年には、6つの部が対早大定期戦を行うなど、戦後の社会の大混乱の時期に、慶應義塾体育会は、フェニックスのごとく立ちあがった。

また、昭和20年代は、体育会に新しい部が数多く加入した時代でもあった。これら各部は、かなり以前より塾内対抗競技部に、新種目団体〇〇倶楽部などの名称で、登録活躍していた。

因みにこれらの部名を挙げると、昭和21年にレスリング部、ボクシング部、アメリカン・フットボール部、昭和22年にハンドボール部、

昭和24年にフェンシング部、軟式庭球部、昭和25年にバドミントン部、昭和27年に自動車部、昭和29年に軟式野球部の計9部である。このため戦前の23部の体育会各部が、昭和20年代には32部へと、急発展した。

要するに、昭和20年代は、部の数が飛躍的に増大し、食糧、物資の極端な欠乏を乗り越え、焼失施設もなんとか復旧させ、明日への発展を目指した、精神的エネルギーにみちた時代であったといえよう。

2 飛躍の昭和30年代

この時代には、昭和33年に重量挙げ部が体育会に加入するのみで、体育会33部の時代であった。

また、この時代には、オリンピック大会も第16回メルボルン大会(昭和31年)、第17回ローマ大会(昭和35年)、第18回東京大会(昭和39年)とつづき、体育会関係者が役員としてこれら大会に貢献しただけでなく、かなり多くの体育会先輩、現役部員が選手として出場し、さらにメダリストとなる選手も、決して2、3ではなかった。この他にも、対校競技、リーグ戦で好成績をあげた。

なお、昭和33年は、慶應義塾創立百周年にあたり、義塾をあげて式典や記念諸事業が行われた。現在、卒業式その他の記念行事の会場として使用されたり、大学の体育の授業や、体育会の数部の練習場、あるいは対抗競技場として使われる体育館的役割を果たしている日吉記念館も、このとき建設された。

また、体育会各部の先輩団体が、「慶應義塾創立百年記念体育施設建設資金」募集事業を行い、約1億円の寄付金を得た。そこで、まず第1期事業として、日吉記念館横に、柔剣道場、卓球場、各部々室等を含む建物を、総工費6千万円で建設した(昭和34年)。さらに日吉に、第1プール(日本水泳連盟公認50メートルプール)、第2プール(水球用プール)、水泳部館山合宿所建設と、水泳部関係の施設を充実させた。

ついで昭和37年には、体育会創立70周年記



東京オリンピックで聖火を持って走る平沼亮三

念式典が行われた。この外、日本も経済的にある程度の復興をみ、海外渡航も、1ドル360円の管理レートながら可能となったので、野球部、端艇部、ホッケー部等々が海外遠征を行った。

各部の対校試合成績、オリンピック出場選手の輩出、施設の充実等よりみて、この時代は、体育会の戦後第1次活躍時代といえる。

3 学園紛争の嵐のなかの昭和40年代

昭和40年代には、部として、昭和44年に航空部、同45年にゴルフ部、同47年に合気道部が加入し、体育会36部となり、またこの36部時代がながくつづく。一方、40年代には、各地で学園紛争が熾烈化した³が、わが体育会は若干のトラブルを除き、学園紛争とは無関係に自己の途を歩むことができた。

さて、40年代には、体育会創立75周年(昭和42年)記念式典が日吉記念館で行われたが、この時代の特筆すべき事項は、同43年に、小泉信三記念学事振興基金が設定されたことである。これは第2次世界大戦の戦前、戦中における塾長であった小泉信三塾長(昭和41年逝去)の遺徳を偲び、関係者が相集い、基金の設定を行ったものである。同塾長は、庭球部長であり、かつ体育会々長として体育会に深い

理解を示されるとともに、つねに体育会部員にあたたかい愛情を持たれ、きめこまかな激励をされてきた。このため、この基金の設定にあたり、体育会の先輩各位が大いに活躍された。そして小泉塾長の体育会に対する考えを後世に伝えるため、「小泉基金による体育の奨励と表彰」を行うこととなった。

すなわち、「義塾の発展に寄与し、塾生の体位の向上をはかり、品性を陶冶し学生スポーツの本旨を全うするため、次のことを奨励する。

- 一、一般塾生に対する体育の奨励
- 二、義塾体育会活動の奨励
- 三、義塾体育振興のため図書ならびに資料の購入」

さらに、「小泉信三記念慶應義塾学事振興基金による優秀な学生の表彰」として、「人物が優秀でかつ健康であり、スポーツを通じて義塾の名声を高からしめた、体育会所属の団体または個人を表彰する。

- 一、全日本学生選手権またはこれに準ずる大会で優勝をとげた団体または個人
- 二、全日本代表選手に選ばれ、国際試合に出場し、我が国スポーツ水準の向上に寄与する業績を挙げた団体または個人
- 三、その他スポーツを通じて顕著な功績を挙げた団体または個人」

これが毎年卒業式のおり、小泉体育賞および小泉体育努力賞として表彰される根拠規定である。ただ時代の推移か、この根拠規定を忘れたか、あるいは体育会関係者でないため小泉体育賞の根拠を知らないためか、最近ときおりこれを曲解することがあるようだ。

昭和47年に体育会創立80周年記念式典が行われ、高橋誠一郎名誉教授の講演、大西鉄之祐氏(早稲田大学ラグビー部元監督)の講演が行われた。

4 華やかな式典と山中山荘改築の昭和50年代

昭和50年代には、昭和58年が慶應義塾創立125周年に当たるとともに、その前年の昭和57年が体育会創立90周年に当たった。そして昭

和40年代に吹き荒れた学園紛争の嵐もすぎ、再び学園に平和が戻ってきた年代でもあった。

しかし、この稿の順序にしたがい、昭和52年には、体育会創立85周年の記念式典が行われ、体育会山岳部先輩横有恒氏の記念講演が行われた。このとき壇上におられた早川種三三田体育会長が、一般席の正面最前列に席を移され、熱心に講演をきいておられたのは、甚だ印象的であった。

昭和57年の創立90周年記念式典は、翌年の義塾創立125周年記念の前夜祭的な気分もあり、華やいだ行事となった。

式典は、福本修二体育会副理事の司会の下で開会、塾歌斉唱、黙禱、石川忠雄体育会長挨拶、早川種三三田体育会長祝辞、部長代表祝辞十時厳周野球部長、部員代表祝辞渋谷浩志水泳部主将、感謝状贈呈(松本小七、石井小一郎両前三田体育会副会長、川島忠男体育会主事)、記念講演青井達也蹴球部先輩、閉会の辞金子芳雄体育会理事という次第であった。この式典は、大学・高校の体育会部員のほぼ全員3千名が記念館のフロアを埋めるという大盛会であった。さらに式後、部員は引き続き記念館前の広場において、体育会理事の音頭により雄叫びの声をあげ祝宴に移った。部員全員が一ヶ所に集まり杯をあげ、将来の活躍を誓うということは、やはり90周年のお祝いだからこそできたのであろう。

つづく翌年の義塾創立125周年記念は、石川忠雄塾長の下で巨額の寄付金が集められ、大学付属病院をはじめとする義塾の諸施設が増設された。体育会において忘れられないのは、125周年記念建設事業の第1号として、体育会山中山荘が完成したことである。

慶應義塾体育会年表(昭和52年発行)は、大正15年10月に「運動場用地として山中湖畔(山梨県南都留郡中野村字平野地内)の土地約2万坪を富士山麓土地会社社長堀内良平および同地有志より寄付、その後、数度にわたって土地を買い入れ、現在(昭和50年)の総坪数27317坪」と記述されている。

さらに同年表は、「昭和3年7月23日、山中山荘開場記念茶話会開催。各競技場および宿

舎の一部が完成し、地元の関係者も招く。完成後の宿舎は木造亜鉛葺2階建、延164坪、収容人員約80名（2年夏にはすでに仮運動場および天幕宿舎を設け、蹴球部、弓術部の選手が合宿練習を行う。また同年9月上旬には浴場、艇庫および井戸完成）」とある。当時の山中湖周辺は、現在からみれば想像もできない寒村であり、多くの住民は米を常食にしない状況にあった。その後増設がなされたり、あるいは第2次大戦後の一時期、周辺の風紀が甚だ悪くなったため、合宿所の蓼科移転も考えられたが、やはり山中山荘は、幾多体育会先輩の汗と涙の青春の思い出の地であった。このため義塾125周年を記念して、老朽化した山中山荘を改築しては……との声があがるや、時を移さず早川三田体育会長自ら副会長以下の方々を引き連れ、山中湖の現地を視察されるとともに、改築についての強い要望を塾当局に提示された。そして石川塾長も、直ちにこれに応えられ、日本国土開発(株)他1社に命ぜられ、現在の山荘が完成された。さらに、この山荘の運動場は、日本国土開発(株)の何回かにわたる献身的搬土、さらに蹴球部先輩有志の尽力による芝生の植え付けなどあり、富士山に向かってキックするという豪快な練習場ができあがった。

5 栄光の昭和60年代

再び、三たび私事にわたり恐縮であるが、わたくしは昭和63年の春、約15年の長きにわたった体育会理事の職を退いた。しかし、わたくしをして、歴代体育会理事のうちで、最も幸福な体育会理事と思わしめたのが、昭和60年、61年、62年の体育会各部の大活躍であった。

早慶戦、これは各部先輩各位が最も関心を持つ対校試合である。この各部早慶戦の勝敗のトータル、これは人により計算方法もいろいろになるが、筆者流に各部男子と女子と別個に計算してみると、昭和59年：20勝23敗1分、同60年：21勝21敗1分、同61年：21勝20敗3分、同62年：21勝22敗3分であった。昭

和61年には、早慶戦トータルにおいて慶應が勝ち、他は5分に戦ってきた。

さらに、毎年春刊行している「体育会誌」復刊35号(昭和60年)には、当時、体育会理事であった筆者の書いた記事が掲載されている。題して、「栄光の昭和60年」。うれしい記事なので、少々長くなるが若干の部分をここに再現する。

「野球は6大学秋季リーグ戦優勝、しかも無敗の優勝という、わが野球部史上2度目の快挙をとげ、余勢をかり全日本学生選手権（神宮大会優勝）を獲得した。

蹴球部は、当初、とかく昨年度のチームと比較され、弱体視されていた。事実、対抗戦グループにおいても4位で、やっと交流試合出場権を獲得した。しかしわがチームに鬼神がのり移ったのか、寅年にちなみ猛虎となったか、早稲田、明治を破り大学選手権を獲得、さらにトヨタ自工を破り全日本選手権まで奪いとり、野球部とならび、兄たりがたく弟たりがたい成績をあげてしまった。

なおこのような快進撃には、8月上旬の弓術部の全日本学生選手権取得にはじまり、端艇部カヌー、馬術部女子、自動車の各部が加わり、会長のいわれる「最大の課題」を早々に実現した。

なおこのほかにも、ハンドボール部の関東学生選手権獲得（ここまできて、全日本学生選手権を逸したのは非常に残念であった）、あるいはボクシング慶早戦において7階級のすべてに勝ち、しかもノックアウト、KO、TKO勝ち、まさにケイオー勝ちの多かったことなども、嬉しい話題を提供してくれた。」

さて、筆者割り当ての紙面をかなりオーバーした。また昭和62年の試合までが、筆者の体育会理事在任中の試合であるので、本稿もこの辺でおわりたい。最後に、戦後の体育会の裏方となり、人に知られない努力を重ねられてきた、照井伊豆、川島忠男、青木安勝の歴代体育会主事の名を掲げ、これらの人たちの努力がなければ、体育会の輝かしい歴史は存在しなかったことを記しておきたい。

（前体育会理事）